

「チーム学校」を掲げる上で不足している要因・今後の在り方

- 「教職実践演習」を受けて (注1) -

加藤彰人（人文学部科目等履修生）

私は、この授業でテーマとして掲げてきた「チーム学校」の在り方について色々な講師の方々の話を聞いて、感じたことが2つある。

まず1つは専門職に対しての教師の歩み寄りが足りないということである。来てくださった先生は2名だったので、あくまでも今回の授業を通して感じたことにすぎないが、教師側が「チーム学校」という方針に前向きではないのではないかという印象を受けた。

例えば、カウンセラー（以下SCと略称）やスクールソーシャルワーカー（以下SSWと略称）の方が、「認知度が低く、受け入れ態勢が未整備な学校も多々ある」と仰っていた。何をもちえて受け入れられていないと感じるかは人それぞれではあるが、週に何度かしか来るのでできない先生に対して、日常的な挨拶を始めとし、少しでも多くのコミュニケーションを取ることによって、専門職も学校現場になじみ、先生もコミュニケーションの延長で相談事ができるようになるのではないかと。受け入れる意志が環境を整えることに繋がってくるし、働きやすい環境を少しでも整えていけば、SCやSSWも外部の人間として扱われているという意識よりも、同じ学校の中で働く先生、同僚、仲間として認識されていると感じることができるだろう。SCやSSWとの生徒情報の共有や連携が密になれば、問題発生時に手遅れになることを防げるのではないかと考えられる。

他にも、現状としてはほとんどなされていないが、塾との連携についても深める余地があるかもしれない。授業のなかで塾講師は、「塾の講師側から見て（あくまでも主観になってしまうが）、学校の教師との接点がまったくなく、オープンスクールや文化祭などで子どもとフレンドリーに話していると、教師の視線が妬みを帯び、煙たがられているように感じる」と言っていた。普段、まったく接点がないのであれば、塾の講師が足を運んでくれている所をチャンスと捉え、話をしてみることがあってもよいだろう。学校の教師とは別の視点から生徒と接している塾の講師の意見などを聞く自ら機会を失ってしまうのは、常に学び続ける姿勢をもたねばならぬ教員としても、惜しいことであろう。客観的に授業を見てくれる立場として意見交換ができれば、そこから学ぶことはたくさんあるはずである。

生徒の人数やそもそもの性質の違いなど、学校と塾の違いは多い。その点、難しいことも多いかも知れないが、教科指導に特化している塾の先生ならではの指導法や面白くわかりやすい授業の作り方など、すぐにでも取り入れることができるものがあれば、生徒のためになる。そうすることで、未だ進展の少ない塾と学校の連携に確かな実績と連携方法が蓄積され、さらなる発展へと繋がると思われる。

ここで挙げたSCやSSW、塾に限らないが、学校内だけに留まることなく客観性を持っている人材を取り入れ、新たな視点を提供してもらうことによって、学校内だけでは発見できないことにたどり着ける可能性も大きくなる。学校という閉鎖的な空間にほんの少し隙間を開けることが、今もっとも重要な課題である。

2つ目としては、学校内部での交流の重要性である。学校と外部との接点も大切だが学校の

内部でも、より密な関係を築けなければ「チーム学校」という政策自体が不可能だと考えられる。学校の近隣地域（PTA）、学校内部、教員同士、教員と生徒が交流を深めるべきだ。

まずPTAがあげられる。保護者とはいえ、現状では生徒40人の保護者と接する機会を頻繁には持つことは難しい。しかし、PTAは学校にくる機会が一般的な保護者よりは多いだろう。それは、地域の中で生徒たちがどのような生活をしているのか、中学校に上がる前はどのような環境だったのかなど、生徒や地域の情報を集めるきっかけになる。そうして関わりが密になれば、たとえば地域で事件が起こった際の迅速な行動が可能になり、地域からの信頼を得られる。これにより、さらに有意義な情報交換ができる可能性が広がる。

そして、教師の子供との向き合い方である。SCの先生が、「(学校の教師には)愛が足りない。個人と向き合ってあげないと。褒めることも大切だが、認めてあげることが必要だ」という話をしてくれた。私は、その通りだと感じる。それは、学校の教師は、どうしても集団と向き合うかたちになりがちだからである。もちろん教師側にも否応ない限界はある。仕事量も多い、部活も見なくてはならない、だから生徒一人一人と向き合う時間は限られていて難しいという事情はわかる。だが、そこが疎かになることで、不登校・いじめ・成績不振などあらゆる問題が起こり、専門職に頼らなくてはならなくなっている側面も否定できない。生徒と向き合うと理想を掲げることは簡単であるが、実際に行うとなると労力と時間がとてもかかり、容易ではないことが推測される。

またSSWの先生も、「集団から浮いている1人として決めつけて見るのではなく、なぜ生徒がそのような行動をするのか、なぜ一人だけ方向性の違うことをするのかということを考え、何か理由があって訴えたくてそのような行動をしているのではないかと疑問に思うことをおろそかにしてはいけない」と言っていた。生徒と向き合う際、頭ごなしに「間違っている」や「しっかりやれ」と言うことは、一番安易な向き合い方であるが、生徒を否定することに直結する。生徒を個人として見ることで、その行動がただ構ってほしくてやっていることであるのか、部員同士のやきもきが現状としてあるのかなど、発見が必ずあると思う。そうして多方面からの可能性を考え生徒と向き合って得た情報は、教員同士で共有し連携を円滑にすることにも繋がり、先生一人一人の負担が軽減されることに繋がるのではないかと私は考える。そして教員同士が情報を共有するという習慣や風習が馴染んでいけば、専門職を外部の人間と認識する教員が減り、関わりをもちやすくなる環境になったり専門職の先生も動きやすく働きやすくなったりすることに少しでもつながっていくだろう。まず学校の中から変えていかないと、「チーム学校」を推進していくのは難しい。

教師側も専門職側も接点がないことを言い訳にするのではなく、お互いに職種の特性や仕事内容を深く理解する必要があるだろう。勤務体制などの長年改善されていない違いを考慮しつつも、学校が閉鎖的になることなく多方面からの情報を積極的に受け入れ、相談をしてみるなど、教師側から少しずつ歩み寄ることも必要だろう。そして、「チーム学校」を掲げるのであれば、掲げるだけにせず異職種が交流できるような講演会や、教員の研修の中に組み込むなどして、制度的に異職種同士が触れ合える機会を増やすべきなのではないだろうか。

注)

- 1) 授業の内容は、前掲(pp.42-46)の堤孝晃「教職実践演習の記録——『チームとしての学校』をテーマとして」を参照。